

炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

写真と文 池内文藏



第9話

六波羅の務めを終え、八条の市で鎌倉の父から指示された物を買求め、日野館に戻ると、大庭の階きざはしに立つこの家の嫡男・資朝すけともが「弥四郎」と扇で差し招いた。

「弥四郎」はかれの家の長子が代々受け継ぐ通称で、かれの父も、いづれ生まれるであろう息子も「弥四郎」を名乗る。資朝が膝を折り、蹲踞ぞんぎよした弥四郎に顔を近づけ、「これを」と、扇の内で囁き懐中から一包の文を取り出した。指定した場所に届けよとの命だ。この日は午前中から市中の巡察などで疲れていたが、家人として使える家の若君の命は断れなかった。「よしなに」と自室に帰る資朝を見送り、弥四郎は再び門を出た。

指定された館は西山天王山の麓ふもとだった。門をくぐり、取次の老女に文を預けた弥四郎は、資朝からのもう一つの命を遂行する為に門を出て館の鬼門を護るかの様にそびえたつ大きな椎の木陰に隠れた。やがて陽が落ちるとしばらくして覆面姿の一団が表れ弥四郎の前を走り去り、その後から立烏帽子の一団が表れた。先頭にいるのは、弥四郎ら六波羅の公安がマークしている大覚寺統の公家・四条隆資で、赤い被衣かつぎを纏まとった貴人を護りながら弥四郎に近付いた。跪ひざまず

く弥四郎を前に隆資が隣の若い公家に―日野の者に相違ないか―と訊ねた。「いかにも」と答えたのは資朝の従弟に当たる日野俊基だった。弥四郎は被衣を預けられ、朝まで待機する羽目になった。館の灯が消えて月光だけになった時、背後の草叢が揺れた。振り返ると立烏帽子姿の影が扇で口元を隠し弥四郎を見つめていた。資朝だ。

―いかがされましたか―の問いにかれは「弥四郎：麿をどう想う」と尋ねた。扇の内から白粉をたっぷり塗り、鉄漿（お歯黒）を染めた容貌が表れた。返答に窮する弥四郎に顔を近付けながらかれは「ほら、よう似合うであろう、そなたがくれた白粉じゃ、右少弁（俊基）と麿、どち域で採取された水銀を京に送り、殿上人らが用いる化粧品を製造し富を得ている。資朝に渡したのはあくまで試供品である。さらに彼の従弟・俊基とはたまの休みに遠乗りに出掛ける仲であり、男色関係はなかった。闇の中で資朝の潤んだ瞳が―答えよ―と迫る。刹那、風が鳴った。新たに近付きつつある一団が、その気配から六波羅の仲間たちだと察知した弥四郎は預かっていた赤い被衣を資朝に被せ押し倒した。

「ああっ…」切なげな悲鳴とともに草叢に仰臥した資朝に馬乗りになり、若君の口唇に自らの口唇を押し当てた。接近して来た六波羅兵は草叢のなかをしばし観察すると事態を察知してその場を去った。やがて暁闇のなかコトを終えた貴人が取り巻きの公家たちと共に現れ、後朝の歌想に耽る。書記役の俊基が錫杖に半紙を巻き待機している。やがて朝靄のなか―まちわびて ついぞかさねし やわはだの―

貴人は上の句を高らかに詠い上げ、紅潮した顔で弥四郎に視線を向けた。意を汲んだ俊基が「直答ゆるすと、帥宮様が仰せだ。和歌を続けよ」と命じた。弥四郎は突然のことに身体中の血が一気に引くのを覚えたが、四条隆資の「宮様のご所望なるぞ」に意を決し

―鉄漿あとこいし はるのどこしえ―と続けた。帥宮が満足そうに頷き「名は」と問う。

「楠木弥四郎兵衛俊親にござりまする」と答えた弥四郎に「楠木か覚えておこう」と十年後踐祚して後醍醐天皇となる宮が強く頷き、その場を去る。振り返ると、草叢の中で身体を起こした資朝が、扇を口唇に当て、上目遣いで弥四郎を見ていた。